

保育者養成における、ピアノ伴奏技能向上の試み

——ML(ミュージックラボラトリー)システムを活用して——

おく だ まさ よ
奥 田 昌 代

1. はじめに

『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』双方において、音楽に関しては5つある領域の中の「表現」の一部として記述されているに過ぎない。『幼稚園教育要領』には、「感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう」とあり、『保育所保育指針』では3歳児以降の保育において、「音に気づき、音楽に親しみ、聞いたり、歌ったり、体を動かしたり、簡単なリズム楽器を鳴らしたりして楽しむ」とある¹⁾。

しかし、幼稚園・保育所の採用試験においては表1に示したとおり、面接以外ではピアノ技能をみる課題の出題頻度が圧倒的に高い。平成15年度(幼稚園96%、保育所87%)、平成16年度(幼稚園94%、保育所87%)も同じような数値になっているので、今後もこの傾向は続くものと思われる。

東北地方の短期大学においても、「幼稚園・保育園の就職試験の現状は、そのほとんどがピアノの試験を課している。」²⁾とのことであるから、この傾向は全国的なものであると思われる。

採用側の試験準備が簡便である、動きを伴うので他の要素も審査しやすい等、採用試験時には他の種々の要因がからんでいるので、このパーセンテージが教育・保育現場で必要とされる能力の重要度順である、と判断する

のは短慮に過ぎると思うが、ピアノ演奏技能が基本的能力として強く求められている、ということは疑いのない事実であろう。

毎年6月に筆者が担当している科目「幼児と音楽」の受講者(2回生全員)に実習に関するアンケート調査を行っている。その中で「これまでの3回(幼稚園2回、保育所1回、各2週間)の実習を通して、幼児教育の先生の音楽的能力としては、何が大切だと感じましたか」と質問している。感じたままを正直に書いてもらうために自由記述にしており、表2は、平成18年度実施の結果をKJ法でまとめたものである。学生自身も実習を通して教育・保育現場においてピアノ演奏技

表1 平成17年度採用試験課題出題頻度

内 容	幼稚園	保育所
ピアノ実技 含歌唱 (初見視奏)	96% (61%)	87% (47%)
論作文	69%	68%
保育実践*	47%	28%
一般常識・適性 (筆記)	45%	52%
絵画・制作	33%	29%
体育実技	29%	11%
専門・教職(筆記)	28%	37%

* 園児あるいは試験官を前に、何らかの保育実践を行う。
本学学生が就職部に提出した「採用試験内容報告書」から。幼稚園(のべ86園)、保育所(のべ65園)

能が非常に重要であると感じていることがわかる。

このような現実を踏まえ、平成 15 年度から導入した ML システム*を活用した授業の中でも、ピアノ伴奏技能向上を図ってきた。

今回、学生の習熟度を正確に把握し、問題点を明確にするために、「習熟度調査(試験)」と「意識調査」とを計画的に行った。

本稿では、それらをもとに、保育者養成におけるピアノ伴奏技能向上のための指導法改善について考察する。

2. 調査方法

「幼児と音楽」受講者 126 名が対象である。年度の初めから各自に持たせているチェックリストに従って、ハ長調、ヘ長調、ト長調か

表 2 幼児教育の先生として大切な音楽的能力

回収数：121, 記入人数：120 人, 意見総数：229

記 述 内 容	記入人数
ピアノに関する記述(意見全体の 56%)	計 134 人
間違えても、とにかく止まらずに弾くこと	43 人
子どもの前に出ると緊張して弾けなくなるので、もっと練習すること	31 人
子どもの方を見ながらピアノを弾く技術	24 人
ピアノを弾けば静かになるし、すぐに集まったり席についたりお片づけしたりするので、暗譜ですぐに弾ける曲のレパートリーを多く持つこと	15 人
リズムを正しくとったり、速さをコントロールできるピアノ技術	9 人
簡単な伴奏で良いので、メロディをしっかり弾くこと	4 人
子どもたちが歌いやすいように弾いてあげること、前奏と後奏の工夫など	4 人
立ってピアノを弾く技術	2 人
子どもが歌いたいと言った曲をすぐに弾けること	1 人
ピアノが弾けるのと弾けないのでは、保育の進み方が違う	1 人
歌に関する記述(意見全体の 26%)	計 59 人
大きな声で生き生きと楽しく歌う力	51 人
正しい音程でア・カベラで歌えること	7 人
歌によって、季節を伝えることができるので大切	1 人
その他(意見全体の 16%)	計 36 人
歌を歌うとき、歌詞の先読みをすること	18 人
音楽で子どもが楽しめるような工夫をすること	4 人
ピアノを弾きながら歌う力	3 人
区切りながら歌唱指導する技術	3 人
歌いだしに「さんハイ」と声を掛けること	2 人
歌に身体表現を交えること	2 人
子ども達は 30 分で歌詞を覚えるのは難しいが、15 分ぐらいしか集中力が持たないので段取り良く指導すること	2 人
「大きな声で」と言うと子どもたちは叫ぶので、「きれいに…」など子どもが理解できる言葉掛けをすること	1 人
音楽指導の時、余裕を持って言葉掛けすること	1 人

* ML(ミュージックラボラトリー)システム: 学生はそれぞれ 1 台ずつ電子ピアノを演奏し、全員合奏もできるが、教員がヘッドフォンとマイクを通してマン・ツー・マンの指導もできる。フロッピーディスクへの録音・再生や、連弾などのアンサンブル学習も可能な機能を備えている。

ら二長調までの各主要三和音とコードによる伴奏付けの説明と演習を行ってきた。

「習熟度調査(試験)」は平成18年12月14日、15日各授業時間内に実施した。課題は当日指定(3曲)、各自30分間練習後、フロッピーに録音して提出するという方法をとった。曲目は下記のとおりである。

メロディへの伴奏付け課題

*「ハッピー・バースデー・ツー・ユー」
(へ長調)

『やさしいピアノ伴奏法』(音楽之友社)
p.18 2.

*「とんでったバナナ」(ハ長調)
歌旋律への伴奏付け

『日本の童謡200選』(音楽之友社)
p.252

コードネーム付きメロディへの伴奏付け課題

*「輪になってまわろう」(二長調)
『続こどものうた200』(チャイルド本社)
p.68

「ML授業(伴奏付け等)に関する意識調査」は、「習熟度調査(試験)」の1週間後(平成18年12月21日、22日)に行った。

質問項目

- 1 伴奏付けに関する受講前の意識
- 2 伴奏付けに関する受講後の意識
- 3 伴奏付け時の意識
- 4 初見視奏に関する意識
- 5 伴奏付けの有用性についての認識度
- 6 連弾演習時の意識
- 7 本学入学時のピアノ進度
- 8 自由記述

「習熟度調査(試験)」時は12名が欠席していたので、有効数は114、「意識調査」時は11名欠席で有効数は115であった。

習熟度と意識度を比べやすくするために、試験の評価は4段階評価にし、意識調査の方も質問7のピアノ進度調査以外は、4分尺度で行った。

3. 結果と評価

「習熟度調査(試験)」結果は表3のとおりである。

「ML授業(伴奏付け等)に関する意識調査」の単純集計結果は、表4のとおりである。

3.1 簡易伴奏付け

受講前は不得手だと感じていた学生が53.9%いたが、受講後は「全くできない」と感じる学生はゼロになり、「ある程度以上にできる」と感じる学生が75.6%になった。

試験結果においては、完璧にできていた者は「ハッピー・バースデー・ツー・ユー」で42.5%、「とんでったバナナ」では34.2%であったが、前者は8小節と短く、既知曲であり、後者は12小節でメロディをあまり知らない学生も多かったことによる差であると考えられる。しかし、「ある程度以上にできる」と判定できた者は、それぞれ72.6%と73.7%となり、学生の意識(75.6%)とほぼ一致する結果が得られた。4分尺度の学生の意識の平均値は1.9913で、2曲の試験結果の平均値が1.9822であるから、この面からもほぼ一致しているといえる。

「伴奏付けができない」群が53.9%から、試験結果では2曲平均26.9%に減り、意識の上でも24.3%に減ったわけであるが、実数として約30名が受講後も習得できていないので、限りなくゼロに近づける指導法を考えていかなければならない。

3.2 コードネーム付きメロディへの伴奏付け

この項目も、受講前は不得手だと感じていた学生が59.1%おり、簡易伴奏付けより苦手意識を持った学生が多かったようであるが、受講後は全くできないと感じる学生はゼロになり、ある程度以上にできると感じる学生が75.7%になった。試験結果においては、2/4拍子、8小節でD、G、Aのコードしか出て

表3 「習熟度調査(試験)」結果

() は人数

* 「ハッピー・バースデー・ツー・ユー」 (ヘ長調)			
	平均値	1.9469	欠損 1
1 できる		42.5%	(48)
2 ある程度できる		30.1%	(34)
3 あまりできない		17.7%	(20)
4 全くできない		9.7%	(11)
* 「とんでったバナナ」 (ハ長調)			
	平均値	2.0175	
1 できる		34.2%	(39)
2 ある程度できる		39.5%	(45)
3 あまりできない		16.7%	(19)
4 全くできない		9.6%	(11)
* 「輪になってまわろう」 (ニ長調)			
	平均値	1.3962	欠損 8
1 できる		75.5%	(80)
2 ある程度できる		14.2%	(15)
3 あまりできない		5.7%	(6)
4 全くできない		4.6%	(5)

こない簡単な曲だったということもあり、9割の学生がほぼできていた。適切な和音を耳で判断するという作業をせずに、書き込まれているとおりのコードを弾けば良く、また『やさしいピアノ伴奏法』の本も持ち込み可だったので、このような好成績が出たと思われる。しかし、何も持たないところでコード付きの伴奏をした場合は、学生の意識調査で出た「できる+ある程度できる」群 75.7%が、実態に近い数値であると思われる。

3.3 有用性認識度

メロディへの伴奏付けの技術は保育者にとって非常に重要であると考えるので、授業時間の約半分を費やして指導しているが、学生個々人が必要性を実感しなければ今後活用することも無いと思われるので、敢えてその有用性について質問したところ、99%の学生が「役立つ」と答えた。

27名が自由記述にも意見を寄せており、

「難しい曲でも簡単な伴奏付けをすれば子ども達は歌えるので役立つ」(6名)、「メロディを覚えていればすぐに弾けるので役立つ」(5名)、「現場では簡易伴奏を使うことが多いと思うので役立つ」(3名)、「難しい伴奏だと子どもが歌えないことがあるので、簡易伴奏付けできる技能が必要」(2名)、「現場では子どもの様子を見ながら弾かないといけなかったので、簡易伴奏は役立つ」(2名)等と書いていた。中には「実習の時に役立ったので、先生になってからも役立つと思う」との記述もあり、この講義開講中に2回あった教育・保育実習の時にも活用して役立てた学生もいたようであった。指導内容の目的が十分に理解され、有益な内容であると認識されていたという結果が得られた。

残念なことに1名が「あまり役立たないと思う」に○をつけていたが、クロス集計してみるとやはり、入学時のピアノ進度は「全くの初心者」であり、質問2の伴奏付け「あま

表4 平成18年度 ML 授業(伴奏付け等)に関するアンケート調査結果

H. 18. 12. 実施 回答数 115 () 内は人数

-
1. この授業で学ぶ前(今年の3月)の状態をお尋ねします。
- ① 知っているメロディへの簡単な伴奏付けはできていましたか? (平均値: 2.6957)
- | | | | |
|-------------|------------|-------------|------------|
| 1 できていた | 13.0% (15) | 2 ある程度できていた | 33.0% (38) |
| 3 あまりできなかった | 25.2% (29) | 4 全くできなかった | 28.7% (33) |
- ② コードネームの書き込まれている、知っているメロディへの伴奏付けはできていましたか? (平均値: 2.7217)
- | | | | |
|-------------|------------|-------------|------------|
| 1 できていた | 12.2% (14) | 2 ある程度できていた | 28.7% (33) |
| 3 あまりできなかった | 33.9% (39) | 4 全くできなかった | 25.2% (29) |
2. 現在の状態をお尋ねします。最も近いもの1つに○をつけてください。
- ① 知っているメロディへの簡単な伴奏付けはできますか? (平均値: 1.9913)
- | | | | |
|-----------|------------|-----------|------------|
| 1 できる | 25.2% (29) | 2 ある程度できる | 50.4% (58) |
| 3 あまりできない | 24.3% (28) | 4 全くできない | 0.0% |
- ② コードネームの書き込まれている、知っているメロディへの伴奏付けはできますか? (平均値: 1.9826)
- | | | | |
|-----------|------------|-----------|------------|
| 1 できる | 26.1% (30) | 2 ある程度できる | 49.6% (57) |
| 3 あまりできない | 24.3% (28) | 4 全くできない | 0.0% |
3. 伴奏付けをする時の、あなたの意識をお尋ねします。最も近いもの1つに○をつけてください。
- ① メロディへの簡単な伴奏付けをする時はどうですか? (平均値: 2.6000)
- | | |
|---|------------|
| 1 何調であるかを判断して、それに合った伴奏をつけている。 | 13.9% (16) |
| 2 一応何調であるかを判断して弾いているが、わからない部分は勘で伴奏をつけている。 | 33.0% (38) |
| 3 何調であるかを判断したいが、わからないので適当に伴奏付けしている。 | 32.2% (37) |
| 4 何調であるかは気にせず、耳で判断して勘で伴奏付けしている。 | 20.9% (24) |
- ② コードネームの書き込まれているメロディへの伴奏付けをする時はどうですか? (平均値: 1.9478)
- | | |
|--|------------|
| 1 書き込まれているコードネームに従って伴奏付けしている。 | 31.3% (36) |
| 2 知っているコードネームには従うがわからないところは勘で伴奏付けしている。 | 47.8% (55) |
| 3 コードネームに従って弾きたいが、わからないので適当に伴奏付けしている。 | 15.7% (18) |
| 4 コードネームは気にせず、耳で判断して勘で伴奏付けしている。 | 5.2% (6) |
4. 全く知らない曲のメロディを見た時、ピアノですぐに弾けますか? (平均値: 2.3130)
- | | | | |
|-------------|------------|------------|------------|
| 1 弾ける | 14.8% (17) | 2 ある程度は弾ける | 47.0% (54) |
| 3 リズムがわからない | 30.4% (35) | 4 全くできない | 7.8% (9) |
5. 簡単な伴奏付けの技能は、幼稚園や保育園の現場において役立つと思いますか? (平均値: 1.3478)
- | | | | |
|---------------|------------|--------------|------------|
| 1 大変、役立つと思う | 66.1% (76) | 2 役立つと思う | 33.0% (38) |
| 3 あまり役立たないと思う | 0.9% (1) | 4 全く役立たないと思う | 0.0% |
6. 初見視奏や伴奏付けの練習のために、隣同士での連弾演習を取り入れましたが、その時の気持ちはどうでしたか? (平均値: 2.0893)
- | | | | | |
|------------|------------|---------|------------|-----|
| 1 大変、楽しかった | 20.5% (23) | 2 楽しかった | 60.7% (68) | 欠損3 |
| 3 楽しくなかった | 8.0% (9) | 4 苦痛だった | 10.7% (12) | |
7. あなたの、本学への入学時のピアノの進度についてお尋ねします。 (平均値: 3.2609)
- | | |
|-------------------------|------------|
| 1 全くの初心者 | 13.0% (15) |
| 2 高校の頃から習いはじめて、バイエルの途中 | 15.7% (18) |
| 3 子どもの頃習っていたが、バイエルから始めた | 20.0% (23) |
| 4 ブルグミュラー、ソナチネ程度 | 34.8% (40) |
| 5 ソナタ以上 | 16.5% (19) |
-

りできない」、質問4の初見視奏「全くできない」と答えていた。今はできなくても「将来的には役立つ」と思うことが進歩につながると考えるので、全員がそう感じられるように講義を組み立てていかなければならない。

4. 考 察

4.1 メロディ初見視奏演習の強化

未知の曲を、楽譜から音を作り出すことのできない学生が多い。意識調査においても38.2%の学生が「リズムがわからない」「全くできない」と答えている。進捗とのクロス集計表は表5のとおりで、検定結果(Kruskal Wallis 検定)も p 値 = 0.000 となり、当然のことながら、進捗の遅い学生ほど苦手意識が

強いことがわかった。

しかし、実際はどうかというと、「習熟度調査(試験)」における「輪になってまわろう」は全員が知らない曲であったので、伴奏付けの評価とは別に、「音不正確」「リズム不正確」を調べたところ、前期試験の進捗とのクロス集計結果は表6のようになった。2/4拍子、8小節の簡単な曲であったにもかかわらず、28.3%の学生がメロディも正確に弾けていない。当然のことながら進捗の遅い者にその傾向が強くみられるが、グレードの高い学生にもいることが驚きであった。表6からもわかるように、「ソナチネ高レベル程度」の学生は全員、誠実に楽譜を読み解いているが、高レベルの学生の中には勘で弾いてしまおう

表5 メロディ初見視奏についての意識

入学時の進捗	弾ける	ある程度弾ける	リズムがわからない	全くできない	合 計
全くの初心者		4人 26.7%	7人 46.7%	4人 26.7%	15人 100%
高校から習い始めて バイエル途中		6人 33.3%	11人 61.1%	1人 5.6%	18人 100%
子どもの頃習っていたが、 バイエルから	2人 8.7%	5人 21.7%	13人 56.5%	3人 13.0%	23人 100%
ブルグミュラー、 ソナチネ程度	7人 17.5%	28人 70.0%	4人 10.0%	1人 2.5%	40人 100%
ソナタ以上	8人 42.1%	11人 57.9%			19人 100%
合 計	17人 14.8%	54人 47.0%	35人 30.0%	9人 7.8%	115人 100%

表6 前期進捗とメロディ初見視奏

不正確 30人(全体の28.3%)

前期進捗	音不正確	リズム不正確	両方不正確
ソナチネ初歩(38人)	20人	9人	9人
ソナチネ中程度(26人)	3人	1人	
ソナチネ高レベル(20人)			
ソナタ程度(7人)		3人	
ハイレベル(15人)	1人	2人	
合 計(106人)	24人 全体の19.0%	15人 全体の11.9%	9人 全体の8.5%

とする者が少なからずいる。

両方の調査から、全体の3～4割の学生が右手のみで弾く初見視奏もできないことがわかった。前年度から音楽理論やピアノ実技、声楽を学んで楽譜に触れ続けているのに、これはゆゆしき事態である。

現在の学生は、子どもの頃から複雑なリズムの音楽に豊富に触れているためか、一度聴くとすぐに再現する能力は驚くほど高い。これも大切な能力であり、それは評価できるが、楽譜から音楽を紡ぎ出す能力のない学生が多すぎる。それでは、新しい曲を正確に子ども達に指導することができないので、今後、初見視奏能力を高める手立てを考えていかなければならない。

これまでは伴奏付け指導を重点的に行ってきたが、その前に右手だけの初見視奏の演習を集中的に行い、段階に応じて初見の試験も設定することで学生の取組みを促すこととする。

4.2 伴奏付け指導手順の変更

今回の調査で最も確かめたいと思っていたのは、伴奏付け指導の手順が学生の実態に適しているかどうかである。メロディに伴奏を

付ける、ということは、まずそのメロディが何調であるかを判断し、その調の主要三和音を駆使して適切な左手を付けるということである。音楽専門の観点からは、それ以外の手順は考えられない。現在入手できる伴奏付けについての指導書のほとんどをあたってみたが、ほぼ同じステップで作成されていた。

しかし、学生は音楽理論の試験の時にはできているのに、鍵盤に向かうと一向に活用できない。その都度説明しても、次の時間にはまた一から説明しなければならないことが多くあった。何調か、という話を始めるととたんに拒絶反応を示す学生もいた。

そこで、どの程度の学生が指導者側の手順に従って伴奏付けしようとしているのかを質問したところ、表7のような結果が得られた。ハ長調、ヘ長調、ト長調、ニ長調の4つの調しか学んでいないのに、手順に従って調判定し、正確に伴奏付けしているのは13.9%しかいなかった。調判定など無視して伴奏付けしている者が53.1%もいることになり、それでも試験結果では平均73%がある程度以上にはできていたので、調判定にこだわらずに勘で適当に伴奏付けして成功している者が相当数いることになる。

表7 伴奏付け時の意識

入学時の進度	調判定して	一応、調判定しようとする	わからないので適当に	勘で弾く	合 計
全くの初心者		4人 26.7%	10人 66.7%	1人 6.7%	15人 100%
高校から習い始めて バイエル途中	1人 5.6%	5人 27.8%	9人 50.0%	3人 16.7%	18人 100%
子どもの頃習っていたが、 バイエルから	2人 8.7%	9人 39.1%	8人 34.8%	4人 17.4%	23人 100%
ブルグミュラー、 ソナチネ程度	4人 10.0%	15人 37.5%	8人 20.0%	13人 32.5%	40人 100%
ソナタ以上	9人 47.4%	5人 26.3%	2人 10.5%	3人 15.8%	19人 100%
合計	16人 13.9%	38人 33.0%	37人 32.2%	24人 20.9%	115人 100%

伴奏付けに対する苦手意識や実際の能力は、当然のことながら進度に強く影響されている。意識調査の質問2①伴奏付けに関する意識、②コード付けに関する意識、と進度とのクロス集計における検定結果はそれぞれ、 p 値 = 0.000、 p 値 = 0.000 であり、「習熟度調査(試験)」結果と進度とのクロス集計における検定結果も、「ハッピー・バースデー・ツー・ユー」 p 値 = 0.000、「とんでったバナナ」 p 値 = 0.000、「輪になってまわろう」 p 値 = 0.000 であり、強く進度に関係しているとの結果が出ている。

しかし、表7に関しては、 p 値 = 0.040 になり、進度の影響が比較的弱くなっていることがわかる。特に注目すべきは、表8(p 値 = 0.042)のとおり、コードネームによる伴奏付けの場合、グレードの低い者もコードに従って伴奏付けしようとしている割合が高い点である。ピアノに自信のある者の方がむしろ勘で弾いている傾向がみられた。3.3項で述べた、ただ一人「伴奏付けは将来あまり役立たないと思う」と答えた者も、コードネームによる伴奏付けに関してのみ、「書き込まれているコードネームに従って伴奏付けしてる」と答えている。これは着目すべき点である。

ピアノ学習歴の長い学生は比較的短時間の練習で楽譜どおりに演奏できる。簡易伴奏付けは、楽譜どおりにはすぐには弾けない進度の遅い者に、より重要であり効力を発する。今回の調査結果から、この進度の遅い者達の苦手意識の低い「コードによる伴奏付け」の方から先に慣れていくという指導法に転換する方が効果的である、という結論に至った。

以前から、エレクトーンを習ったことのある学生は伴奏付けが非常に得意である、と感じていた。しかも、その曲が何調であるかを考えてから弾いているのではなくて、自然に左手が和音を正確に捉えているのである。エレクトーン学習は徹底してコードによる伴奏付けを行っており、それで慣れた者はコードが書かれていない楽譜を前にしても自然に体が反応するようになっているのではないかと推察する。語学に関しても、文法を学んでから理解していく方法もあるが、とにかく耳で親しんで会話の中で慣れていく方法もある。話せるようになることが主な目的である場合、後者の方が有効である、ということは周知の事実である。

簡易伴奏付けの指導は今まで前者の方法に固執してきたが、今回の調査結果から、後者

表8 コード付け時の意識

入学時の進度	コードネームに従って	わかるコードネームには従って	わからないので適当に	勘で弾く	合 計
全くの初心者	2 人 13.3%	6 人 40.0%	7 人 46.7%		15 人 100%
高校から習い始めて バイエル途中	3 人 16.7%	12 人 66.7%	3 人 16.7%		18 人 100%
子どもの頃習って いたが、バイエルから	6 人 26.1%	12 人 52.2%	5 人 21.7%		23 人 100%
ブルグミュラー、 ソナチネ程度	14 人 35.0%	19 人 47.5%	3 人 7.5%	4 人 10.0%	40 人 100%
ソナタ以上	11 人 57.9%	6 人 31.6%		2 人 10.5%	19 人 100%
合計	36 人 31.3%	55 人 47.8%	18 人 15.7%	6 人 5.2%	115 人 100%

の方法に転換するほうが有効であると考えるに至った。

自由記述に「1回生の時から調号の読み方を習い、今ではそれを活用して伴奏付けできるようになったので、とても良かった」との意見もあり、指導どおりに受け止めて向上している者もいることは確かなので、順序立てた説明も当然行っていく。しかし、今後はコードを見ながら弾く演習を優先させ、耳と手の感覚で慣れることを重要視していきたい。

4.3 連弾演習時の指導法の工夫

表2のとおり、学生が実習中に感じたように、幼児教育・保育の現場では、ピアノに関してはたとえ間違えても音楽を止めないで演奏し続ける能力が最も重要である。そのため、現在の時間的・物理的制約の中では、MLシステムを活用した、隣り合った2台のピアノでの連弾練習が最も効果的であると考えるので、簡単な伴奏付けや初見視奏の練習などで、できるだけその方法を取り入れてきた。その時、多くの学生はアンサンブルすると「楽しい」という声を発するが、途端に暗い表情になってしまう者もいた。音楽実技は学習者が楽しめていないと学習効率

も上がらないので、今回その点に関する実態を知ることでも大事な目的の1つであった。

その結果は表9のとおりである。苦痛に感じていた学生は10.7%おり、「楽しくない」と感じていた学生と合わせると18.7%にもなった。20%近くも否定的な感情を抱いているということは問題である。

進捗とクロス集計結果を検定してみると、 p 値 = 0.212 となり、進捗による有意差はみられなかった。自由記述をKL法でまとめてみると、「ペアである相手に迷惑をかけているようでいやだった」という意見が11名あり、最も多かった。それならペアのレベルを一致させるようにすれば良いかということそうでもなく、「2人ともピアノが苦手だと難しい」(2人)、「隣の人がゆっくり教えてくれたのでやりやすかった」(2人)との記述があり、片方がある程度できる者でないと、演習の教育目的が達せられないことがうかがえた。「友達と教え合いながら楽しくできて良かった」(3人)との記述もあり、相手との人間関係が教育効果を左右する要素であることがわかった。指導者が普段の学生の人間関係を知することは難しいので、自分達でペアを決める方法を、まずはとってみたい。そして学生相互の教育

表9 連弾演習時の意識

入学時の進捗	大変 楽しかった	楽しかった	楽しく なかった	苦痛だった	合 計
全くの初心者	2人 14.3%	8人 57.1%	2人 14.3%	2人 14.3%	14人 100%
高校から習い始めて バイエル途中	5人 27.8%	6人 33.3%	1人 5.6%	6人 33.3%	18人 100%
子どもの頃習って いたが、バイエルから	4人 17.4%	12人 52.2%	4人 17.4%	3人 13.0%	23人 100%
ブルグミュラー、 ソナチネ程度	9人 23.1%	27人 69.2%	2人 5.1%	1人 2.6%	39人 100%
ソナタ以上	3人 16.7%	15人 83.3%			18人 100%
合計	23人 20.5%	68人 60.7%	9人 8.0%	12人 10.7%	112人 100%

力も活用して指導に反映していきたいと考える³⁾。

5. おわりに

MLシステムは、伴奏付けや初見視奏の指導及び演習においてその機能を最も発揮する⁴⁾。保育者養成において、現場で必要とされるピアノ技能の応用力を高めるには最適のシステムであるといえる。特にフロッピーに録音することによって、これまで時間的に到底でき得なかった個々人の習熟度の確認と、それに基づいた指導が細かくできるようになった。学習記録が音で残るので学習意欲も高まった。また、アンサンブルできる機能を活用することにより、保育者にとって大切な音楽を止めない能力も効率的に高めることができるようになった。

今回の研究結果を基に改善を重ねていくが、その他にも多重録音の機能と音色変化の機能も活用していくことを考えている。

4.3項で述べたように、連弾練習が効果的であると考えますが、それと平行して個々人が多重録音することで「音楽を止めないで演奏し続ける能力」がより高まると思われるからである。

また、ピアノ技術の本質的な向上には何ら繋がらないとの考えから、これまで「ピアノ」の音色でしか演習を行ってこなかったが、

「様々な音色を探ったり、組み合わせながら、個人で、あるいは友達と創り出す過程を楽しんでいる」⁵⁾との研究報告もあるので、今後はその機能を使うことも検討していきたい。

保育者養成におけるピアノ伴奏技能向上のための指導法において、MLシステム活用の可能性は大きい。音楽の楽しさを伝えることのできる保育者を養成するために、楽しみながら必要な技術を身に付けていけるようなカリキュラムの改善を重ねていきたい。

引用・参考文献

- 1) 『幼稚園教育要領』文部省告示第174号、第2章、『保育所保育指針』、厚生省児童家庭局発行児発第799号、第7～10章
- 2) 三瓶令子：保育におけるピアノ伴奏に関する再考察—身体的対話性の視点から—、全国大学音楽教育学会研究紀要、第17号、13頁(2006)
- 3) 藤澤 孚：本学に於けるM.L.音楽教育の理念と実践—特にペア学習法・歌唱法について—、全日本電子楽器教育研究会蔵、173頁(1994)
- 4) 宮川陸男・久保田進子：ソルフェージュ授業におけるMLと自動演奏ピアノの活用、全日本電子楽器教育研究会蔵、77頁(1993)
- 5) 笹井邦彦：保育者養成におけるM.L.の教育的効果性に関する一考察、全日本電子楽器教育研究会蔵、109頁(2000)

(受理 2007年3月1日)